第三回新鋭評論賞　準賞

# 山口青邨の海外詠
## ―『雑草園』から『雪國』への連続性

渡部　有紀子

# 山口青邨の海外詠～『雑草園』から『雪國』への連続性～

## （一）

旅に出れば俳句を積極的に作ろうとするのは、俳人たちの習性のようである。現在刊行される句集の中に旅先での作品がないケースは珍しい。行き先も日本国内にとどまらず、アジア諸国、北米、欧州をはじめ中東、アフリカ、中南米と俳句に読まれない土地などないかのようだ。このように日本から頻繁に海外へ移動できるようになったのは、一九七〇年代に入ってからである。大量輸送が可能なジャンボジェット機の就航により、旅費が大幅に下がり海外旅行の一般化が進んだ。一九九〇年に出国者数は一〇〇〇万人を突破し、二〇一四年は一六九〇万人である（観光庁ウェブサイト「統計情報」より）。

明治、大正、昭和初期まで、外国へ行けるのは留学や企業の調査、政府関係者などに限られていた。日清、日露の戦争を通じて日本が大陸における権益を得たことにより、当時の満州、朝鮮、台湾には日本人が多く居留し、現地の俳句会が興っていったケースもある。この時代の海外詠（現在の日本の領土を基準として、それ以外の地で詠まれた俳句）は、朝鮮半島および中国、従軍に伴う南洋諸島での作品が大部分を占め、欧州での俳句作品は少なかった[1]。

同時に、四季の区別がはっきりとは分かりづらい熱帯地域において、風物をどの季題で詠めばよいのかという悩みが在留日本人より発生する。高浜虚子は、このような声に応えるべく、昭和十一年の渡仏の途中、シンガポールに立ち寄り、「熱帯季題」を提唱するに至っている。

虚子は訪欧中にパリ、ベルリン、ロンドンで講演を行っているが、ベルリンでの講演の中では以下のようなことを述べている。いわく、フランス、ドイツに滞在している日本人の中には、四季の変化が厳密でないから俳句は作れないという声もあるが、季節の移り変わりが日本ほど明確でなくとも俳句を作るに足る材料はある。しかし、「日本ほど四季の変化に富んだ国はないと確信」して、「どこまでも俳句は日本の国土が生んだ文芸」であり、「俳句を作るには日本を宗としなければならぬと考えます、日本は俳句の聖地エルサレムであります」（虚子１９２２）ーあくまでも俳句は日本の気候、風物に馴染む文芸であり、海外詠俳句は不可能ではないが、それは俳壇では傍流であると言わんばかりの主張である。虚子の訪欧は、満朝に比べまだ俳句愛好者の少なかった欧州の在外日本人に、「俳句の種を蒔く」ことを目的としていた。そのため滞在中に接触する人物は現地の日本人会会員や領事館員、日本文学の研究者など、日本語の話せる者に限られていた。句会などしても「何れも異郷に在つて日本をなつかしむ情は濃厚」で「（外国の地で）俳句を作ることは即ち日本の天地山川、春夏秋冬を思ひ出すよすがとなる」状況であった（虚子１９２２）。虚子自身も日本の感覚が保持されていたのか、滞欧中

の作品は旅行者としての物珍しさから風物を見ていた印象が拭えない。

虚子でさえ難しかった海外詠俳句。これに成功しているのは、昭和十二年にドイツのベルリン工科大学に二年間留学した山口青邨の、第二句集『雪國』（昭和十七年刊）にある一七四句の海外詠作品である。やはり青邨も、「今までとは異なった材料にぶつかって、或るぎこちないものを感じた」と語っているように、海外での作句には苦労したようである。「季語の日本と外国との感じ方の相違―少なくともその間にある違和感というギャップを最小にするための取捨選択、適応性を吟味しなければならなかつた。さらになるべく前書や説明をつけないでわかるようにつくりたいと思った」（青邨１９７７）とあるように、『雪國』での海外作品には、作句した国や地域の名前が紀行の記録的に付されてはいるものの、取材した内容を説明するような前書きは、ドイツにおける「収穫祭」とキリストの生誕を祝う「ワイナハト」の二箇所、計七句に限っている。日本では馴染みのないものであるため、読者の理解を助ける目的でやむを得ず付けたのであろう。ただし、それも最低限の行事の説明にとどめている[2]。

『雪國』の海外詠作品には、欧州での景が日本の読者にも分かるように（一）物の配列（二）現地語の響きの利用（三）地名の利用という大別すると三つの工夫がなされている。それらの工夫と青邨が留学前に行っていた作句手法とはいかなる関連があるのか、本稿ではこの点について、青邨の留学前後の作品を読み解くことを試みる。即ち、第一句集『雑草園』（昭和九年刊）および第二句集『雪國』の留学前の昭和十一年までの作品と、『雪國』の留学中の海外作品とを比較して、その作句手法の連続性を検証したいと思う[3]。

（二）

句集『雪國』における青邨の海外俳句の工夫について、順を追って見ていこう。

【物の配列による効果】

昭和十二年二月、山口青邨こと山口吉郎は、専門の選鉱学の研究のためにドイツへ出発する。神戸を船で発って途中寄港した上海で、

たんぽゝや長江濁るとこしなへ（昭和十二年）

を得る。この句のように二つの物を並べて、それぞれの形状や質感の対比から句の世界を作りあげているものは、『雪國』の海外詠作品の中にもう一つ、

曇りつつ大英帝國馬鈴薯（い も）の花（昭和十三年）

がある。句の成り立ちとしては、大英帝国と馬鈴薯の花、長江とたんぽぽと言うように、小さくささやかな形態の植物に着目し、広大なものと対峙させる。より一層「大英帝國」の格式と伝統の深遠さ、「長江」の悠久の迫力を際立たせている。同時に、たんぽぽの虚ろな茎一本や、花弁の目立たぬ馬鈴薯の花で、長江や大英帝国を受ける季題とすることにより、花たちの存在感に読者の視線は集中し自然の力強さを知る。

一句の中で物を配列させる手法は、『雪國』留学前の、

一巫の水仙一塊の冬菜かな（昭和十年）

でも確認できる。この句について青邨は次のように自解する。「こういうものの取上げ方、表現方法は写生俳句のうちの私なりのものである（中略）眼に見えるものは水仙と冬菜である。一本の水仙と一つの白菜を一茎とか、一塊とかいう言葉で、数だけでなくものの形、姿をもっとも簡素に表現した。この簡素は二つの物にコントラストを与え、ひたすら眼を注がせる効果をもっている」（青邨１９７０）。つまり、徹底的に物を簡素化することで配列したときに劇的な対比が生まれ、そこに俳句読者の眼を「ひたすら注がせる効果」を持つことを狙っているのである。

「この方法は科学と全く同じだった。複雑なものを単純化して、一つの法則を作ることが科学者のすることであった。一本一草の写生の尊さと面白さを知った」（青邨１９７０）。複雑に見えるものから徹底的に余計なものを削ぎ落とす。そうした物を改めて配列することで、そこに共通する自然の美を見出そうとする。このような物の取り上げ方は「写生俳句のうちの私なりのもの」と青邨は述べているが、大正七年にホトトギスの読者となり、大正十年より虚子に師事、投句を始めて以降、写生がモットーのホトトギスの中で「きびしい鍛錬を受けた」というので、ちょうど年代的にもこのような物の見方、把握の仕方は、初学の頃の青邨の写生修行であったようだ。

【一句の中での時間経過】

初学の頃の写生句は他にも『雑草園』に収録されている。

茱萸の花一つ一つに雨雫（昭和五年）
山吹の蕾とがりて竝びけり（昭和六年）
一つづゝ柿かゞやいて盆の上（昭和七年）

どれも物体の集合体から一つずつを切り離してその形状や状態を描こうとしている。ある一塊を構成する物へ俳句作者が目を移して行くとき、そこに時間軸が生じる。青邨は、写生のための物体の把握を重ねるうちに、その行為に存在する時間軸に気づいたのではないだろうか。留学前後の物の配列による構成の句は、読者の眼を注がせる

即ち、読者の視線を誘導する手法を基礎にしていると理解するならば、『雑草園』にある次の句も、後の「長江」や「大英帝國」の海外詠の礎石であると言える。前述の「長江濁るとこしなへ」「曇りつつ大英帝國」という余韻を読者に感じさせる箇所はこの初学の頃の名残とも言える。

をみなへし又きちかうと折りすゝむ（昭和四年）
わが前に垂れて花あり枝垂梅（昭和九年）

（三）

このごろや春月高く地中海（昭和十二年）

と、青邨は船旅の末に欧州に到達する。興味深いことに、この句の直前に掲載されているシンガポール、インド洋での作品には「夕立」「虹」「スコール」「籐椅子」「涼し」「稲妻」と盛夏から初秋の季題が使用されているのに対し、地中海に入ってからは「春月」「霞」「春の蝶」、留学先のベルリンに至ってからは「若葉」「新緑」と、季節が逆行している。通常、句集というものは編年体で作る場合は四季の順に句を配するものだが、赤道近くのシンガポールから北緯三十四度以北のイタリア、フランス、ドイツでは気候ががらりと変わる為、実感としてはこの季題の選び方の方が合っていたのだろう。この点を指摘した鳥羽とほるは、青邨の「（句を作る時は）どこまでもモチーフを重んじたい、ものに対して感動して、詩が生れるのである（中略）決して季題に使はれてはいけない、こっちが季題を使ふのである。夏に冬の季題の鷹を詠む必要が起こったら、どしどし詠んだらよい、要は出来た作品の問題で、よい作品ならすこしも支障ない」という言を引きつつ、『青邨は季節の真中（まんなか）にあつても、時に当季の季物でないものを詠む、「もの」を見、「もの」の核心を捉へることが伝統俳句の真の遣り方だ―と言つてゐるかのやう』と述べている（鳥羽１９８３）。

【現地語の響きの活用】

青邨の「現場主義」とも言えるこの姿勢から一歩進めて考えると、外国にあって、日本のカレンダーの日付上の季節感とは多少ずれていても、現地にある風物を臆せずに季題として取り上げていくことになるが、『雪國』では、現地の人々が話す言葉の雰囲気や響きまでをも季題に盛り込もうとしたようである。例えば、「伯林にて二十六句」とある一連の句の中には、人口に膾炙している

舞姫はリラの花よりも濃くにほふ（昭和十二年）

があるが、この直前二句は

男女私語カスターニエの花こぼれ（昭和十二年）
夏は來ぬ人はにほへりバラとリラと（昭和十二年）

と、同様に花の季題を使用している。異国情緒あふれるリラの花だけで満足せず、薔薇は「バラ」、橡の花ではなく「カスターニエの花」（カスターニエはバルカン半島原産の西洋トチノキのこと）として、エキゾチシズムが発露するかのような言葉の表記を選んでいる。

現地の言葉を生かして作られた作品として、青邨の工夫が最も感じられる作品に

學徒われ降臨祭（フイングストビーヤ）麥酒さゝげ飲む（昭和十二年）

が挙げられる。この句は、斎藤夏風より『……俳句の読みはドイツ語「フイングストビーヤ」で調べを整えている。（中略）実質的に日本語はルビの働きをさせながら、ドイツ語そのものを一句に作句したのである』（斎藤１９７７）と指摘されている。同様に「日本語はルビの働きをさせ」ている句として

外套にあふれ除夜祭（ジルベスター）の裳の裾が（昭和十二年）
雪の上にジルベスターの假面（マスク）捨つ（昭和十二年）
降誕祭（ワイナハト）待つ燭こよひともすなり（昭和十二年）

がある。青邨は、現地の言葉の響きを活かして作句している点を指摘したが、行事の名前にも独特の響きを持つ言葉として捉えていることが、この四句からわかる。現地語はやはり現地での響きでないと、その土地で見聞した景が伝わらないという判断もあったのだろうか。このような推測を裏付けるエピソードとして、「白夜」に言及した青邨の言を引きたい。『雪國』の中に

わが泊つる森のホテルの白夜なる（昭和十二年）
枕辺の薔薇くれなゐに白夜なる（昭和十二年）

があることから、この「白夜」の読み方について問い合わせがあった。共に昭和十二年のスウェーデン旅行中の作である。青邨の回答としては、「はくや」。その根拠として、大正八年にシベリヤを訪ねた際の経験を述べている。「半年のシベリア旅行中にベーラヤノーチ（※筆者加筆：ロシア語で「ベーラヤ」（бела́я）は白、「ノーチ」（но́ч）は夜、直訳すると「白い夜」）といふロシヤ語で知つた」「（白を）はくでよいのをびやくと読み、高級になるような気がしたのであろう。（中略）何もかもお経読みにしなくてもよい」（青邨１９７７②）と述べて「びやくや」を退けている。原語を素直に訳して読もうとする態度は、季題の現場、現地で生きる人々が話し、その土地その土地に根付いた言葉を尊重し、意味や響きを俳句に配することで句の景に臨場感を与えるのに成功している。

青邨がこのように現地の言葉の響きに着目できた理由として、ドイツ語、英語、フランス語と語学に堪能で外国の地にあっても周囲の人々の話す内容を理解するのに苦労があまり無かったことも大いに影響があるだろうが、筆者は、青邨が俳句を始める前の山口吉郎としての文芸活動および、第一句集『雑草園』におけるオノマトペ使用の句の存在も考慮したい。大正九年十一月より、文芸同人誌「玄土（くろつち）」に山口吉郎の訳でシュトルムの「蜜蜂（イムメンゼー）の湖」が掲載される。完結の後シュトルムの評伝を書いた中で青邨は、シュトルムの言葉は「ハーモニアス、メロディーがある為に、シューマンの音楽と比較された」と述べている。翻訳を発表するほどシュトルムの文章に感化された経験は、

ワゴンリ白夜の森をいま過ぐる（昭和十二年）

の音楽的な旋律をも感じさせる作品へつながっているのかもしれない。

【オノマトペの多用】

音楽的とまでは言い切れずとも、言葉の響きが持つ韻律の妙を青邨は留学前から意識をしていたことは、『雑草園』の

ぺかくと打ち寄す波に凧（昭和四年）

から以降、十二句のオノマトペの句が昭和四年から昭和七年にかけて集中的に見られることから分かる。『雪國』においても留学の三年前、昭和九年を中心に七句見つけられる。

夜の闇くわいくと鳴く蛙かな（昭和四年）
こち向いてぽかりくと桔梗かな（昭和五年）
ころくと鳴り出す釜や吸入器　（昭和六年）
初凪や白髯橋はうすくと（昭和七年）
からくと車がゝりの四つ手かな（昭和八年）
茶を運ぶばさりくと時雨婆（昭和九年）
沼もあり草ほうくと雪の果（昭和九年）
雨どゞと白しの花びらに（昭和十年）
たわくと降りくる鳩や初不動（昭和十一年）

留学直前までに作られたオノマトペ使用の句である。特に、昭和十一年の「降りくる鳩」の句などは、新年の明るい日差しの中をまさに今、鳩が広げた翼にたっぷりと空気を孕ませながら地に降り立とうとしている景が、見えてくるようである。

オノマトペを使用しての作句は、ベルリン滞在中の作品でも

ことくとつき來る女木の芽闇（昭和十三年）
海神の肩どゞとうつ噴水は（昭和十三年）

が認められる。

（四）

【地名のシンボリックな利用―海外作品および日本での作品―】

ドイツ留学中、青邨は本業である選鉱学のためにドイツ各地の採鉱施設を視察すると同時に、精力的に欧州各地―フランス、イギリス、アイルランド、イタリア、チェコ、オーストリア、ハンガリー、オランダ、ベルギー、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク―を旅行する。その中で、

四月馬鹿ローマにありて遊びけり（昭和十三年）
山高帽（やまたか）に夕立急ロンドンはおもしろし（昭和十三年）

と、地名を使った作品を得ている。第一句目について。南欧の温暖で恵まれた気候と明るい光、そこで育まれた古代都市国家の文明、人間中心的で開放的。そのような背景を持つ「ローマ」という地名に、上五で「四月馬鹿に」と副詞的な役割もしている季語が据えられることで、本当に呆けて遊んでいたという、享楽的な景が出現する。それに対し、十九世紀の産業革命以後に急速な発展を遂げた都市ロンドンはどうであ

ろう。貴族たちによる文化が花開いた古代ローマに対し、新興のブルジョワたちの象徴とも言える山高帽が行き交うロンドンのたたずまい。合理的で、工場での労働によって定着した時間厳守の通念。人口の流入激しいこの近代都市の一画の、せわしない往来。そこへ夕立が降り注ぎ、そして去ってゆく。「おもしろし」というように活気はありながらも、陰鬱な曇空の下での景である。この句が描いているのは単に雨が多いという気候的条件だけで出現した街の景ではない。このように青邨は、欧州の各都市の成り立ち、歴史的背景をも巧みに生かして、地名を句の中で使用している。

同様に、日本国内でも各地の採鉱地を訪ねることが多かった青邨には『雑草園』の頃より旅先での地名を使用した句が、『雑草園』で十五句、『雪國』では、日本国内だけを数えても七句が収められている。

山下りて朝顔涼し京の町（大正十二年）
天近く畑打つ人や奥吉野（大正十五年）
山眠る大和の國に來て泊る（昭和五年）
香取より鹿島はさびし木の實落つ（昭和八年）
馬育つ日高の國のをみなへし（昭和九年）

「青邨には、地名を用いた名作が多い」（有馬２００３）と評されることもあるが、ここに挙げた句はどれも、地名の持つ歴史的、文芸的背景を抜きにしては鑑賞し得ないだろう。

【地名のシンボリックな利用２―青邨の「みちのく」―】

このような地名の効果が最も発揮されているのは、『雑草園』において虚子より絶賛された「みちのく」を詠んだ作品である。

虚子は句集序文において、「氣候に恵まれたとは云はれない、比較的文化に遅れた、生活程度の低い、古来からみちのくと呼ばれた處に人と成つた君が、其のみちのくに愛着を持つ心の裡には一種の寂しさがあり又燃ゆるやうな熱情が反抗的にある」との言葉と共に、豊かな情緒が漂う青邨の写生句において、最もそれが濃厚なのは故郷「みちのく」を詠った句であると指摘する。句集刊行の直後には、富安風生が「……『みちのく』などといふ文字は完全に作者のものになつてしまつた」と称賛し、「山口青邨＝みちのく俳人」としての評価はほぼ定まった。

みちのくの町はいぶせき氷柱かな（昭和五年）
みちのくの雪降る町の夜鷹蕎麥（昭和六年）
みちのくの雪深ければ雪女郎（昭和七年）
みちのくの今ぞ種蒔いそがしく（昭和八年）

みちのくはわがふるさよ歸る雁（昭和九年）

『雜草園』に收められた昭和五年から昭和九年の「みちのく」の句である。

『わが國のいはゆる東北地方といふものには……淡い文學的ヴェールがかかつてゐた、（中略）私はこのすなほな洗練された美しい言葉を作つた先人達に敬意を表し度い気持である。（中略）「みちのく」といふ何とも言へない、見ても書いても聞いても實によい感觸を與へる言葉になつてしまつたのだ、―私はただそれを借りただけのことである。（中略）そして私はこの言葉にいかにしていかなる生命を吹きこむかに苦心した』「みちのくといふ言葉の中には……文化から遠い、時代から隔離した―といふことから自然に起るいろいろなものが含まれてゐる、さらに氣候が寒いとか、雪が降るとか、雨が冷いとか、山が高く、木が深い、川は急である―といふやうな自然の條件をも併せて、そこに住む、人間、動物、植物にまで影響を與へてゐるのだつた。（中略）さういふ風物がこのみちのくといふ詩語に含まれてゐる。とにかくみちのくといふ言葉は外形上からもその包藏する内容からも有利な言葉である。……これを巧みに利用することは俳句のごとき短い詩においては賢明なことだと思ふ。」「（みちのくという詩語を）まづまづ無難に使ひ得てゐるとすればそれは私が東北の産であつて、東北の自然も人も體得してゐるからであると思ふ（中略）そこから生ずる感情にはいつはりはない、自然の観察、人間の習俗を眺めて起る感情はいつはりではない……その素材なり感情なりが板についてゐるのだらう」（青邨１９５８『「みちのく」といふ言葉』）。

少し引用が長くなったが、青邨がみちのくについて語ったことである。東北に生まれ育つ中で自身の血肉となった風土に立脚した上で、「みちのくは詩語」との認識を持つ。そして、みちのくという言葉が先人たちの文芸作品の積み重ねや地理的、歴史的条件を通して形成されたイメージ、象徴的な景色、それらをどのような句材や表現合わせて一句に仕立てるかという点に、青邨自身の労苦があると。青邨は決して故郷が詠いたかった訳でも、故郷に対して強烈な望郷の念を押し出すことがしたかった訳でもないと筆者は考える。偶然、東北に生まれ育ち、抒情豊かな「みちのく」という言葉が育まれた気候やそれに制約を受ける人の生活を肌で知る環境にあり、俳句と出会った時に、このあまりに短い詩形には「みちのく」という、それだけで豊かな情緒を漂わせる詩語が有効であると気づいたのである。

「みちのく」を詠むことだけに拘泥していたわけではないことは、例えば「夏草」同人の鳥羽とほる氏に、青邨夫人が「本当は東北は余り好きぢやないんですよ」と秘かに言っていたり（鳥羽１９８３）、『雜草園』の中に「はからずも故郷に歸ることありて」との前書きで收められた昭和七年の連作三句

みちのくはまだく冬や猪を賣る（昭和七年）

上の橋下の橋あり雪の町（昭和七年）
月まはり来て照らしたる氷柱かな（昭和七年）

に、「みちのく」使用した句が一句しかない上に少々ぶっきらぼうな印象を受けることからも推測できる。実際、青邨が書いている随想文には、「草市の立つ夜店を眺めながら散歩するなどまことにたのしい。近親の佛達ももう古くなつて、悲しみもうすらいでゐるからだらうが、田舎にゐてはこんな軽い気持では居られない。祖先代々のきづなにしばられて何かと重くるしくなるのだ」（青邨１９５８）ともあり、強烈な望郷の念などがあったとは単純には言い切れない。むしろ、そのように一歩引いた立場から「みちのく」と名指しされる故郷を客観視することができたからこそ、抒情ある句の世界を生み出せたのではないだろうか。

古舘曹人は、青邨俳句のみちのくとは「（故郷を離れ）書斎人となって後の作品」であると指摘する。彼は、山本健吉が青邨のみちのく俳句には「さほど東北の庶民生活の匂ひが出ているわけではない」と批判していることを紹介しつつ、「青邨がみちのくを口にする時、そのみちのくは東北の庶民生活そのものに向かってゐるのではなく、みちのく人の見る一つの幻影を追ふてゐるのではないか」「みちのく人の幻影といふものは、みちのくの風土より脱出して、その反射としてみちのくを匂はせるのである」（曹人１９６０）と反論する。筆者もこの考えには共鳴する。

みちのくの淋代（さびしろ）の濱若布寄す（昭和十二年）
祖母山も傾山も夕立かな（昭和八年）

淋代の句は『雪國』昭和十二年の作品、祖母山は『雑草園』昭和八年の作品である。或る句会で「若布」の題を得て淋代の聚落を頭に浮かべ、名前のあわれさから、若布の寄る光景を想い作句したと自解されているように、地名の響きに惹かれて作った句である。淋代では若布が実際は採れないと、この句の景に異論を唱える人もいるが、詩の世界としては際立つような説得力を持っている。青邨にとって、淋代という地名は一種の音楽的響きを持つ美しい言葉として受け止められている。そのような地名の把握は、「祖母山」の句にも明確に表れている。祖母山の句は山本健吉に「山の名称、発音が奇であり、それを受けた「夕立かな」のつまった表現も、風景の急変にふさわしく、強い調べ……大づかみで単純な直叙の句の、一本の棒のような表現のよさがある」（山本２０００）と、評されている。大分の鉱山を訪ねた帰りに馬上から見た景であるが、二つの山の名が青邨の中で、堂々たるますらをぶりの響きと感じられたのだろう。二つも固有名詞を重ねながら全く韻律に無理のない句の構成は、単に訪問

先で見た山がそういう名前であったから、記念として俳句に使用したという消極的な態度ではなく、地名の響きが最大限活きるように使用されている。

以上、青邨の『雑草園』および『雪國』のドイツ留学前における「みちのく」作品を検証するに、地名の持つ文学的、歴史的背景とそのイメージ、地名を発声した際の音としての響き、それら二点を地名という言葉で象徴させて作句に反映していることがわかる。この経験は、『雪國』の海外詠における句へと引き継がれている。

このごろや春月高く地中海（昭和十二年）

四月馬鹿ローマにありて遊びけり（昭和十三年）

山高帽（やまたか）に夕立急ロンドンはおもしろし（昭和十三年）

惨として大英帝国夕焼す（昭和十三年）

（五）

ここまで山口青邨の第二句集『雪國』における海外詠作品と、第一句集『雑草園』および『雪國』における留学前の作品とを比較してきた。青邨の海外詠には―（一）物の簡素な並列によって読者の視線をその対比に注がせ、そこから生み出される詩の世界を広げる（二）行事や風物の言葉が持つ響きを重視する（三）地名・国名を固有の歴史的・文化的イメージの象徴として使用する―と、いう特徴的な作句手法がある。これらは、既に「雑草園」および「雪國」の昭和十一年までの日本国内での諸作品で十分に試みられていたと言える。ここに、『雑草園』と『雪國』との連続性が見出だせる。

【海外詠が青邨にもたらしたもの―季題の開拓、みちのく俳句への反映―】

青邨はドイツ留学中に、日本在来の情緒をそれ自体に内包している季題を使いながらも欧州の風物の現場の雰囲気を伝え、作者の心情を俳句に読み込む工夫を重ねた。それらの作句手法は、青邨に日本で鍛錬した写生の技術以上に眼前の景を観察することを要求し、いつしか青邨は季題が内包している従来の日本型情感を超えたところで、季題と句材とを響かせあうことを会得したのではないだろうか。

風車春宵の闇に翼をひたし（昭和十四年）

この「春宵」などは、従来の漢詩的趣味の季題の理解だけでは、早春のオランダの風車の大きさは見えてこないであろう。今日盛んに海外俳句が作られているが、これを可能にする為には、俳句作者も読者も使用されている季題の日本的な感覚の枠を超えての理解が不可欠であり、その意味で青邨は海外俳句の先鞭をつけたと言える。

みちのくの乾鮭（からさけ）獣の如く吊り（昭和十五年）
みちのくの鮭は醜し吾もみちのく（昭和十五年）
みちのくの鮭とレンブラント解剖の図と（昭和十五年）

ドイツ留学から帰国した後の昭和十五年の作品として『雪國』に収められている句である。ここでの「みちのく」は留学前のそれとは異質なものである。かつての青邨俳句の「みちのく」という詩語は、文芸の先人たちが築きあげた美しい幻影的なイメージを纏って一句の詩世界の構成に影響していた。

みちのくの町はいぶせき氷柱かな（昭和五年）
みちのくのつたなきさがの案山子かな（昭和五年）

この頃は幻影的なイメージを壊すことはない句材が選択されていた。対して帰国後の「みちのく」は、干された鮭の、眼孔は落ち窪み、歯はむき出しの貌の荒々しさ、不気味さを演出する厳しいイメージの言葉として、新たな側面が与えられている。それは何よりも「獣のごとく」という、乾鮭に肉迫するかのような生々しい描写表現に尽きる。欧州での作句の経験を経て帰国し、今、故郷から送ってきた乾鮭を見て「醜し」と思ったのである。みちのくに生を受けた青邨が「なるほど、お前も醜いぞ」といったのである。もとより「自分も醜い」ということも含めていったのであるが、「鮭（＝彼）と吾」という二項対立が存在するこの時点で、既に「みちのく」は青邨にとって相対化の対象として存在にするに至ったことが、明確に自覚されている。「みちのく」は青邨にとって故郷であるということから完全に脱却し、詩世界を構成する重要な語であり、美しさも荒々しさも併せ持つ豊かな響きを持つものとして、青邨ははっきりと認識するに至ったのだ。その自覚を持って、オランダで見てきたであろうレンブラント解剖図とみちのくの鮭を配列して、故郷と欧州の交差を楽しむ余裕さえ漂わせている。青邨は第三句集『露團々』以降もみちのくを詠んでいくが、それは『雑草園』の頃より試行を重ねた作句手法が、留学中の海外詠を通じて洗練された成果として、再び「みちのく」の詩世界に反映されていった結果なのである。

みちのくの青きばかりに白き餅（昭和二十三年）
みちのくに貞任橋や虫の原（昭和二十九年）

---

[1] この時代の特筆すべき海外俳句作品としては、山口誓子の第二句集『黄旗』がある。昭

和九年（一九三四年）十一月から十二月にかけて、勤務先の住友本社の社用として、満州と朝鮮に出張した際の二一九句を書き下ろしで一冊の句集にまとめ発表した。句集刊行の目的は、哲子本人が自序の中で述べているように新興俳句の守備であり、新しい素材を詠むことに哲子は腐心していたが、厳冬の満州においては、殺風景な風物しか見受けられず、本土で考えていたような新感覚で新素材を詠むことには成功し得なかった事が、作品に使用された季語の範囲の狭さから戸恒東人によって指摘されている。（戸恒２０１１）

[2] 参考までに、『雪國』でそれぞれの行事に付された前書きを記す。
収穫祭：「毎年十月第一日曜日、全ドイツを挙げて収穫祭を行ふ、ヒットラーはビュッゲルブルグといふ田舎町に出向き、全國より集り來れる農民に演説をなし、交歓をなす、ドイツに於ける農民中心の唯一最大の祭なり」
降誕祭（クリスマス）：「十一月も末となればアドヴェント・クランツとてタンネンの葉をもて作り、四本の蝋燭を立てたる花環を街にて賣り出す、家々、求め來りて、卓上に飾り、クリスマスの前四つの日曜日に先づその一本の蝋燭をともし、次の日曜日に第三の、次の日曜日卽ち最後の日曜に第四の蝋燭をともす、かくしてクリスマスを待つなり」

[3] なお、『雑草園』は昭和九年に発表されたが、後の昭和五十一年に初版から何の取捨増減もなく『定本雑草園』として株式会社東京美術より発刊されている。本稿では、以後『雑草園』と記すときはこの昭和五十一年版を底本としていることを予め断っておく。

引用文献一覧

青邨１９７７：山口青邨（１９７７年）「私の俳句作法」　『夏草』昭和五十二年三月号P.8－13
青邨１９７７②：山口青邨（１９７７年）『三艸書屋雑筆』　求龍堂
青邨１９７０：山口青邨（１９７０年）『自選自解山口青邨集』　白鳳社
青邨１９５８：山口青邨（１９５８年）『現代俳句文學全集　山口青邨』　角川書店
虚子１９２２：高浜虚子（１９２２年）『渡佛日記』　改造社
鳥羽１９８３：鳥羽とほる（１９８３年）『九容の長壽』　さき書房
斎藤１９９７：斎藤夏風（１９９７年）『蝸牛俳句文庫３２　山口青邨』　蝸牛社
有馬２００３：有馬朗人（２００３年）『現代俳句の一飛跡』　深夜叢書社
古舘１９６０：古舘曹人（１９６０年）「山口青邨論―その俳句と人間形成―」　『夏草』昭和三十五年一月号P.32－44
山本２０００：山本健吉（2000年）『俳句鑑賞歳時記』　角川書店

参考文献一覧

山口青邨（１９７６年）『定本雑草園』　東京美術
山口青邨（１９４２年）『雪國』　竜星閣
山口青邨（１９８２年）『伯林留学日記　上・下』　求龍堂
京極杞陽（１９４２年）「特に滞欧作品に就いて―「雪國」より―」　『夏草』昭和十七年四月号P.16－19
石原透（１９７０年）「青邨俳句のすべて―自句自解「青邨句集」を読んで―」　『夏草』昭和四十五年六月号P.30－35
杉野炭子（１９４２年）「雪國に寄す」　『夏草』昭和十七年六月号P.15－16
小原啄葉（１９７７年）「山口青邨論」　『夏草』昭和五十二年十二月号P.28－34
古館曹人（編）（１９９１年）『昭和俳句文学アルバム31　山口青邨の世界』　梅里書

房
山本健吉（１９９０年）「山口青邨」　『新版現代俳句　上』　角川書店 P. 230 - 237
山本健吉（１９９３年）「旅について」　『山本健吉俳句読本第一巻　俳句とは何か』
角川書店 P. 95 - 100
阿部誠文（１９９６年）「海外俳句史ノオト」　『俳句研究』第六十三巻第三号（平成八年三月号）P. 54 - 59　富士見書房
星野恒彦（１９９６年）「海外詠と季語の問題」　『俳句研究』第六十三巻第三号（平成八年三月号）P. 40 - 44　富士見書房
石原八束（１９９６年）「海外俳句の詩品」　『俳句研究』第六十三巻第三号（平成八年三月号）P. 26 - 31　富士見書房
山口誓子（１９３５年）『黄旗』　龍星閣
戸恒東人（２０１１年）『誓子―わがこころの帆』　本阿弥書店